

家族縮小期および高齢期における現代家族の住居の選択行動と住まい方に関する研究

代表 伊藤 香織（日本女子大学 住居学科 助手）

委員 鈴木 佐代（日本女子大学大学院 人間生活学研究科 大学院生）

沖田 富美子（日本女子大学 住居学科 教授）

〔研究報告要旨〕

現在、団塊の世代を含む人口規模の大きい世代が家族縮小期および高齢期のライフステージを迎えており、この世代が現在から将来にかけてどのような住居や住まい方を選択していくかを明らかにすることは、今後の住居計画の基礎的資料として重要であると考えられる。そこで本研究では、これらライフステージにおける家族構成の変化、住まい方、住居選択の状況、将来の住まいの希望を明らかにすることを目的とする。

第1章では研究の目的と問題の所在について述べた。

第2章では調査の概要について述べ調査対象者の世帯属性と住戸の特徴について整理した。

第3章では、家族縮小期および高齢期の家族の特徴を、夫妻の退職状況と夫婦関係、子どもの独立状態、親の加齢の3点から把握し、さらにこの時期の家族（夫妻）が、成人の子どもあるいは高齢の親とどのような世帯を形成しているかを明らかにした。

第4章では、家族生活空間（ダイニングまわり、リビングまわり、和室）および個室空間においてどのような生活行為が行われているかを夫、妻、長子の3者について検討した。またLD広さによって行為を行う際に使用する空間の組み合わせに違いがあるかを分析した。さらに、各生活行為をどのような人と一緒に行っているのか、家族内、家族外それぞれの場合について考察した。

第5章では、これまでの持家の取得経歴および10年後の定住・移住の希望より、この期の住居選択行動を明らかにするとともに、居住してきた住宅の子世代への継承の可能性を探ることで戸建住宅の行方について検討を行った。

第6章は、将来の住まいとして希望する住宅の種類について高齢者施設を含めて把握した。同時に子供の独立状態や、将来の子供との住まい方に対する希望を明らかにして、これらが将来の住まいとして希望する住宅の種類にどのような影響を与えているかを検証した。

第7章では、家族のライフステージの特徴と世帯形成、家族生活空間および個室空間における住まい方、住居選択行動、高齢期の住まいに対する希望の現状を明らかにした。